

海のさん歩

和泊町立大城小学校 四年 岩元 俊輔

ぼくは、夜光貝のアクセサリーを夏休みの思い出に作ることにした。ぼくはお店に入ると、かめの形をした夜光貝が気になった。なぜかぼくに、

「ぼくを作って。ぼくをけずって。」

と、話しかけているように感じた。ぼくは、時間をかけてやすりでこすり、夜光貝でカメを完成させた。

「ゆめに出てきてほしいものを、まくらの下に入れるといいよ。」

と、ぼくはじいちゃんが言っていた言葉を思い出し、その夜光貝のカメを、まくらの下に入れてねた。すると、

「ぼくも海に行きたいな。海にかえして。」

と、どこからか聞こえてきた。朝になり、あの声がゆめなのかなと、なんだか不思議な気分になった。

次の日、ぼくはみんなといっしょに、海に行った。まぶしくてきらきら光っている海で泳いでいると、ふと、昨日のゆめで聞いた声を思い出した。あれは、きっと、この夜光貝のかめだったんだと、ぼくは思った。手ににぎりしめていた夜光貝のかめを、おもいつきりとおくの海にあげた。そして、ぼくはみんなとまた泳

いだ。しばらくして、海の中で何かがキラキラ光っているように見えた。ぼくは大きく息をして、海の中にもぐった。そこにいたのは、あの夜光貝のかめだった。ぼくは目をばちくり。

「ありがとう。ぼくの声が聞こえたんだね。泳いでみたかったんだよ。この青い海で。」

と言いながら、気持ちよさそうに泳いでいた。

太陽の光に反しゃして、かめのこうらはキラキラ光り、まぶしかった。青い海の中で泳いでいるかめを見ていると、いっしょにぼくも泳ぎたくなった。

「いっしょに泳ごうよ。」

と、かめに声をかけた。すると、かめは何も言わず、せ中をぼくに向けた。

ぼくはかめの中に入り、つかまって海の中のさん歩に出発した。今まで見たことのないぐらい、きれいなエラブの海だった。ブダイやベラが、気持ちよさそうに泳いでいる。さんごもしゃこ貝も見えた。エラブの海もきれいだ、最高だと思った。

しばらくすると、小さなあなの中に入ってしまった。そこは、しょうにゆうどうできていた。水がすきとおっていて、本当にきれいだった。おくへ行くと、見たことのある木が見えた。海の中に、なぜガジュマルの木があるんだろうと不思議に思いながら、もっとお

くへ行った。すると、ユリのとうが見えた。そして、こし山、大山、田皆岬まで見えた。さいごうさんのとうぞうもあつた。まるで、海のエラブ島だつた。そこには、ぼくが生まれ育つた、きれいな沖永良部島がもう一つあつた。

「おうい、しゅんすけ。」

と、遠くでぼくをよぶ声が聞こえた。ぼくは、

「かめさん、ありがとう。ぼく、みんなのところへ帰るよ。とても楽しかつた。また、今度いつしよに遊ぼうよ。」

とぼくが言うと、

「ぼくも楽しかつたよ。ありがとう。こんなきれいな海で、もう一度泳ぎたかつたんだ。さあ、みんなのところへ帰ろう。」

と、かめは言つた。

そして、またぼくは、しっかりとかめのせ中につかまつて、いつしよに泳ぎながら帰つた。その時、海の下に光っているものが見えた。ぼくが手でそれを拾おうとすると、するつとかめのせ中からぼくの手がはなれてしまつた。ぼくは、

「待つて。」

とさげんだ。

目を開けると、ぼくはベッドの上にいた。ふとんが

ぬれていた。え、おねしよと思つた。でも、ちがう。ぼくの体中がぬれていた。

あの青い海、さんご、そして、かめはゆめだつたのかな。まくらの下を見してみると、夜光貝のかめがのこつていた。

